

英断がいにし国産化

第6部 陶磁器を世界へ〈6〉

時流の先へ

中部財界ものがたり

見慣れない三角形の陶磁器製の二つの破片が、目の前に差し出された。白い方は一辺が三寸、茶色の方は二寸ほど。「これを日本でつけないか」。一九〇五

(明治三十八)年、前年に日本陶器を立ち上げた大倉孫兵衛と、長男で初代社長

の和親の元を、芝浦製作所(現・東芝)の若手技師、岸敬二郎(故人)が訪れ、こう切り出す。破片は送電時の感電、火災などの事故を防ぐために必要な絶縁体の高圧がいし片で、岸によると米国トーマス社製だという。

「今後、電力需要がどんどん増える。こういう素材の高圧がいしが必要になる」。岸が大倉親子の前で熱く語る。

電気事業の視察で米国を訪れた岸は、たまたまニューヨークの森村ブラザーズで日本陶器の良質な陶磁器

を見つけ、市街定した絶縁性能が求められるがいしには陶磁器がうってつけだった。当時、市街

地の小規模な送電に使う低圧がいしは国内でも生産されていたが、高圧がいしは割高な輸入品に頼るしかなかった。

「陶磁器の製造国として優れていながら、送電用がいしを外国から買うなど奇怪千万だ」。岸はたたみかけるように続けた。岸の思いを受け止めた孫兵衛は「重役会に諮ってみる」と約束する。

高圧がいしの製造が提案された日本陶器の親会社、

森村組(現森村商事)の重役会は、賛否が真っ二つに割れる。元日本ガイシ専務、藤村哲夫(故人)の著書「土と炎とエレキテル」

などにやりとりが残る。「二兎を追う者は一兎をも得ずだ」。当時はまだ純白のディナーセットが完成する前で、洋食器事業との

共倒れを恐れた森村市左衛門ら幹部は声を大にして反対を唱える。別の幹部は立ち上がり「がいし事業に失敗すれば会社の将来を危くする」と訴える。

がいし国産化の決意を固めていた孫兵衛は「どんな苦境にあろうと取り組まなければならぬ」と一歩も引かない。最後に和親が「私にお任せください。必ず成功させてみせますから」と言い切って反対論を抑え込み、がいし製造が決

まる。

このころ、近代化が進むにつれて電力・エネルギーの確保が国家の発展のために必須となっていた。和親は後に「営利ではなく、国家への奉仕としてやらなければならぬと決意した」と振り返る。

大倉親子の奮闘により、後に日本碍子(現日本ガイシ)が日本陶器から独立することになる。元社長の小原敏人(父)は「輸入品をいかに防ぎ、国益の流出を抑えるかが大事だった。がいし製造は非常に勇気のある決断だった」と思いをはせる。

がいし国産化のきっかけとなった岸が持参したがいし片はその後、額に大切に納められ、和親の座右に置かれた。藤村は著書に書き残す。「彼は困難に突き当たると、二つの破片を見ては励まされ、勇気を取り戻したに違いない」

(文中敬称略)

「時流の先へ 中部財界ものがたり」の過去の記事は、中日プラス(chuplus.jp)で閲覧できます。



明治時代に米国から持ち込まれ、日本碍子(がいし)設立のきっかけとなった茶色釉と白色釉のがいし片=愛知県小牧市の碍子博物館で



大倉和親

大倉和親(おおくら・かずちか)1875(明治8)年、東京・日本橋で大倉孫兵衛の長男として生まれる。94年に慶応義塾を卒業後、森村組神戸支店に勤務。翌年に渡米して森村ブラザーズに勤める。1904年、29歳で日本陶器の代表社員(社長)に抜てきされる。17年に東洋陶器、19年に日本碍子をそれぞれ分社化し、初代社長に就任。19年に「良きがうえにも良き物を」と高級陶磁器、大倉陶園を設立。24年にはタイル製造の伊奈製陶(後のINAX、現LIXIL)の設立を支援し、会長に就く。55年に79歳で死去。

社業案ずる反対論抑え

「時流の先へ 中部財界ものがたり」の過去の記事は、中日プラス(chuplus.jp)で閲覧できます。